

# アメリカ留学体験記(2)

善光寺海外留学僧 島崎義孝

## ヨーロッパのKZS

この夏筆者は初めてヨーロッパ諸国を訪れる機会に恵まれた。マウテンセンターの安居を途中で辞したのは少々残念だったが、八月十日から十月七日までのおよそ二ヶ月間、じつに多くの人々に会うことができた。今回の渡欧には前角老師のつよい勧めがあり、玄法師が筆者の同行を快諾してくださったことによって実現した

のだが、誠に感謝にたえない。前半一ヶ月はイギリス、オランダ、ポーランドでの摂心、後半はZCLAやKZSのメンバーの世話で西ドイツ、フランスの観光をかねた宗教施設見学に時間を費した。その摂心の様子などをごく大まかに記しておきたいと思う。

ヨーロッパ・サンガの摂心は右の順序で行われた。KZCからは玄法師のほかに二人の女性メンバーが加わり、筆者とボストンで合流して

イギリスに向った。KZSはイギリスに二つの場所を確保している。今回われわれが摂心をもったのはロンドンから北北西、およそ二〇〇キロメートルにあるプレストン (Preston) の近郊、ウォルフエル (Wolffell) という田舎町のはずれである。ヘアーム・ゲートと呼ばれる旧農場がそれだ。あたり一帯は見渡すかぎり、なだらかな起伏に富んだ牧草地で、羊や乳牛があちこちで草を食んでいる。摂心にあてられた建物は十七世紀のものだそうだが、石造りの小さいががっちりしたつくりをしていた。屋根裏部屋を入れると三階建て、日本風というと三畳から六畳間ぐらいの部屋が七室ある。そこに四十人近い人が泊まりがけてくるのだから、たいへんな混みようだ。禅堂にあてられた部屋はいちばん大きい、これだけの人数にはさすがに狭い。たまにしかない摂心で皆はりきっているのはわかるのだが、慣れていないのでなにをしても動

作がぎこちなく多少のもどかしさを感じざるをえない。

坐ぶとんなど横からすかしてみると厚そうだが、実はそうではなく、なかの綿が四方にだけ、中央の部分は薄くなっている。坐蒲もしかり。円形か方形かわからぬものがあってふぞろいだ。人によってはヨーロッパの仏教はアメリカのそれより十年遅れているというが、こんなちよつとした用具類を見ても何ほどかのちがいを感ぜざるをえない。

摂心のスケジュールはKZCのそれとほとんど変りがない。今回のばあいというわけかイギリスでだけヘアークシヨップが二日間あった。たぶん他での摂心との時間調整の意味もあったのだろう。ヘアークシヨップというのは坐禅とか摂心に関する予備知識を与える実践的な学習会で、坐わり方はどうする、経行(きんひん、こちらではヘムービング・ザゼン)とも呼び、

坐禅中の足の疲れを休め、また睡眠を防ぐため、一定時間ごとに歩行する」というような内容が説明される。摂心じたいは六日間だった。昼食のあと午後の坐禅まで二時たらずあつて、皆で牧場のなかを散歩したりという時間枠ももうけられている。筆者はちよと渡英中の師匠、盛永宗興老師をロンドン・ゼン・センターに尋ねるため四日目の朝プレストンを辞した。老師とは八ヶ月ぶりの対面である。

ロンドン市内にもいくつか禅グループがあるそうだが、こちらで知りあつたある人が市内の観光につれていってくれたついでに、ロンドン・ゼン・ソサエティ(ロンドン禅堂)にも案内してくれた。彼の自宅からさほど遠くはなく、自分も朝はたいていここに来て坐るといつていた。ベルモントと呼ばれる通りに面した閑静な住宅街の一角にあり朝夕それぞれ、二時間の坐禅を行っているという。ロンドンではどこにでも

あるごくふつうの住宅だが、筆者が行つたときには八人の人が禅堂にいた。数人はレジデントで、京都の相国寺から来た安藤承純師が住み込みで世話をしておられる。このソサエティは臨濟宗の龍沢寺(静岡県三島市)の鈴木宗忠老師が永くかかわつてこられたが、過去五年は健康がすぐれないため絶えて渡英はないということだつた。

ロンドン滞在中にはいくつかの観光地も回つてみたが、出発の日の午前中、郊外のハイゲート・パーク(Higate Park)に行つてきた。言わずと知れたカール・マルクスの墓がここにはある。古い大きな墓地で他にも多くの著名な人々が眠つている。マルクスの墓は今新たに四メートルばかりの石像に建て替えられ(一九八三年)、写真でみおぼえのある彼の胸像が凛と遠くを見据えていた。ハーバード・スペンサーがそのすぐむかいにある。最初の墓がどこにあるかしら

んと思つて、入口で買った地図を頼りに捜してみた。うっそうとした雑木林のなかに苔むしてゆがんだり、倒れたりしている墓標が不規則に何十列も見えかくれして続いている。じめじめした雑草のなかを目をこらして見てみたけれ



ど、それとははっきりとは識別できなかったのは残念である。

同じ日の午後、ヒースロー空港からアムステルダムに飛んだ。飛行時間は一時間、その時差も同じ一時間である。玄法師と侍者の女性メン

バーは飛行機の都合でベルギーからのアムステルダム入りだったが、筆者と同じフライトに乗るはずのもうひとり女性メンバーがなかなか現れずやきもきさせられた。後の話によると国際線と国内線のターミナルを間違えたのだという。ヒースローでは表示が入りこんでいてしばしば起こることなのだそう。

オランダはむかしから日本人には馴染みの深い国で、一面にひろがるチューリップ畑のなかに風車が点在している、というイメージを抱いていたのだが、なにかもが想像とは異っていた。八月下旬はもちろんチューリップの季節ではない。風車は現在では観光資源として保存されているだけだという。花が咲き乱れ、一面の青空が広がるというのは五月下旬ごろの一ヶ月足らずで、あとは一年中、曇天か雨の日が続くのだそう。なるほどオランダの撮心中もずっとそんな空模様だった。ネーデルラント(低地)

とも呼ばれるだけあって、出迎えに来てくれた人の話によるとアムステルダム空港あたりは海抜下八メートルだという。視界にはどの方向にも山らしき物はなく、ただどこまでも平野が続いている。目的地のランゲン・ブーム(Langen Boom)までの二時間のドライブ中ついにこの風景は変わらなかった。

KZSはオランダでも二ヶ所を撮心に使っている。ひとつはハーレム(Harlem)市に近いフオーゲレンツァング(Vogelenzang)のデイ・テイルテンベルク(De Titenberg)という集会所である。ランゲンブームにあるテレシア・ホーバ(Therasia Hoeve)はもうひとつの施設で、利用度はこちらの方が高い。ヘテレシアの農場という名が示すように、元来はカトリックの尼僧修道院だったそうである。四十人あまりの撮心参加者にはやはり手狭な建物だが、いちおう団体生活ができるような構造になっているのでそ

の点では比較的使いやすいといえよう。一階にオフィス、調理室、集会室をはじめホールいくつかの個室。二階は元の礼拝所のような空間があり、そこでわれわれは坐った。同じ階には中央の狭い廊下をはさんで両側に五部屋ずつならんでいる。

建物のなかで寝泊りできない人は庭にテントをもち込んでいた。いつときは色、かたちの様々なテントが一〇張ばかりならんだらうか。途中つごうで帰る人、やってくる人もしばしばあり、部屋が空くと先に来た人順にテントを撤去してなかで寝るといふぐあいだった。

困ったのは作務の時間で、雨でも降ると外の仕事ができずみな建物のなかで何か捜すのだが、小さな調理室で十人ほどの人がひしめいているとか、掃除機の使用順序をくじびきで決めるというようなこともあった。もうひとつはトイレ(とりわけ朝)のことである。とにかくどこ

でも女性が半分以上いるので、ひとりの使用時間がきわめてながい(ように思う)。摂心にまで化粧品を持ち込む必要はないというのがこちらで、身だしなみのためといわれればそれまでだが、待っている人がほかにもいることを少しは考えてもらいたいものだ。筆者が僧堂の生活がよかつたと思うのはこういふときである。

イギリスの摂心では坐ぶとん・坐蒲の質がよくないと書いたが、テレシア・ホーバではもっと悪かつた。坐ぶとんはなく、厚さ三センチぐらいのスポンジにそれらしく布カバーをしているだけで、坐蒲といつてもみがるのようなのを厚さ一〇センチ、直経二〇センチあまりの筒状に縫った袋にかたくつめ込んだ代物だ。床の硬さがにわかには慣れたと思つてくる者にも随分こたえた。

サービスはイギリスでもそうだったが、まったく摂心のアクセサリーとでも考えているのか、いっしょにやっつけてもどうも身がはいらない。KZSではZCLAのそれよりサーヴィスは短く、たとえば朝(般若心経(漢訳)、参同契(英訳)、延命十句観音経(漢文読み)、昼(般若心経(英訳)、夕(大悲呪)というぐあいではテンポも早い。とくに延命十句観音経は九説している。そしてそれぞれのお経の後に廻向を読み上げるのだが、途中でよくつまったり、読み誤らったりあるいは声の調子がはずれてしまう。木魚や■子を打ちそこね、打ち方にも随分ムラがあるというあんばいである。もちろんふざけているわけではない、みなまじめなのだがただやり方をしらないだけなのだ。もしわれわれがキリスト教の儀式をやれと言われればこれ以上にひどいことになるだろう。適当な指導をできる人が彼等じしんのなかから出てこなければなら

ない。

テレシア・ホーバではとくに色々な人と知り会ったが、この人たちが後にドイツ、フランス旅行のときに大いに筆者を助けてくれた。

さて、オランダからポーランドへの移動はじつに強行軍だった。なにしろ一〇〇キロ近くの行程を一日で走りぬけようというのだ。それでも一年間に数えるほどの摂心しかなかったので、終了後もとくに急用でもなければ帰る人はなかった。皆少しでもながく一緒に時間を過していったかったのだろう。前夜も円陣をくんで、遅くまで歓談していたが、四時半起床、五時出発というのはとりわけ運転してくれたメンバーにはたいへんだったと思う。早朝にも拘らず出発する者、見送る者、全員が起床した。乗用車、小型レンタルバスで一五人が分乗した。車のなかでも話していたことだが、実に七ヶ国もの異なった国籍の人々がポーランドに向ったのであ



る。面白かったのはイギリス人とアメリカ人は英語(ないし米語)しか話さないのに、他のヨーロッパのメンバーは少なくとも三ヶ国語が使えるのである。しかもみな英(米)語に堪能しており、車内がドツと笑いの渦にあるなかで筆者ひとりだけがとり残されるようなことが再三で、こども語学の未熟を味わうはめになった。

オランダは小さな国だ。西ドイツの国境までおよそ三〇分。まだ暗闇のなかボーダーを通過するさいにパスポートを提示するのが当然と想っていたら、行き先を尋ねられただけですんなりと西ドイツに入ってしまった。

西ドイツは知られているようにアウトバーンの発達した国でスピード制限はない。筆者などは文字通り便乗させてもらっていただけなので、その分じゅうぶん外の景色を楽しむことができた。イギリス、オランダでは湿気が気になったが、アウトバーンでは日中だったせいもあ



るが、カリフォルニアを思い出させるような乾いた空気にふれた気分であった。ドルトムント(Dortmund)、カッセル(Kassel)を経て東ドイツの国境にさしかかったのは昼すぎである。西ドイツでは五〇〇キロばかり走ったそうだが、途中で食事や休憩したこともあつて六時間余り西ドイツにいたことになる。

東ドイツはポーランドに行くために通過するだけなのだが、長蛇の車の列をならばなければならなかった。入国検問所は見通しのいい平野部にあり、附近は東ドイツの国旗が林立している。グレイに塗りたてられたいくつかの管制塔や嚴重に張りめぐらされた金網などがいかにも〈国境〉の存在を感じさせる。数珠つなぎになった車を管理官が一台ずつ座席やトランクはもちろん、手荷物類までいちいち調べるので、われわれの順番がくるまで二時間近く待った。車から降りて道路沿の芝生で寝そべったりするほ

ど退屈な長い昼下がりがだ。後のことであるが、アメリカへ帰る飛行機に乗るため西ドイツからアムステルダム行きの列車に乗ったときも、国境あたりで犬を連れた管理官が数人乗り込んできた。このときは肩からかけた銃をそれぞれ保持していたが、パスポートの提示を求められただけで荷物をチェックすることまではしなかった。どこでも麻薬類の持ち込みに神経をとがらせているのだという。

東ドイツからポーランドまでまた数時間のドライブである。西ドイツとは異なり道路幅もやや狭く、舗装のぐあいもありよくない。途中、日本と見紛う光景を何度か目にした。両側に十数階建てのいわゆる〈団地〉が群をなしているのである。ドライブインとか休憩所に属するものは一切なく、オランダから持ち込んだ飲物類でのどを潤すしかなかった。ポーランドと東ドイツの国境はイエルニア・ゴーラ(Jalania

(Gora)という古い都市のただなかにある。検問所さえなければヨーロッパのどこにでもありそうな中世のたたずまいをもった都市である。落ちついた、というよりは少し陰鬱で殺風景だと感じたのは夕暮れだったせいだろうか。入国手続きを終える頃にはとつぷりと日は暮れていた。そこから目撃すプレシエカ(Presieka)までは二時間余りのはずだったが、夜間の不慣れな道路だったため、たびたび道に迷ってやり過したり、ひき返したりした。けっきょく着いたのは一一時を過ぎていた。出迎えの人のなかにはつい数週間前までマウンテンセンターと一緒に過ごした見覚えのある顔がみうけられた。皆寝ずに首をながくしてわれわれの到着を待っていてくれたのだ。

ポーランドは今回のヨーロッパ・ツアーで出発前からもうとも筆者は関心をもっていた。われわれ日本人にはほとんど未知の国である。百

年以上前、プロシア遊学の途路ポーランドにたちよった木戸孝允が亡国の民の悲惨を目のあたりにし、日本の立憲君主制化が急務であることを痛感したということを何かの本で読んだことがある。ドイツとオーストリアによる「ポーランド分割」の時代もあるがその歴史を通じてこの国は他国からの侵入をしばしば受けてきた。

十二世紀にもモンゴル民族の侵入を受けているが、ある人たちによると仏教ともそのときすでに何かのかたちで接触があったらしい。ポーランド語で「起きる・覚める」という意味の単語は「ブディジイ(BUDICIE)」というのだそうだ。ブツダー目覚めた人、というのに音が似ている。だが、ポーランドは伝統的なカトリックの国で、われわれがはつきり知りうる仏教の紹介はごく最近のことに属する。いくつかのサンガがあるがもともとはやいグループは一九七五年、フィリップ・カプロー(Philip Kapleau)師によ

って設立された。同師はそのうちにポーランドから手をひき、現在はトロント・ゼン・センターのゼンソン・ギフォード(Zenson Gifford)によって指導されている。七八年には韓国のソーエン・サン(Seung Sam)師のグループができた。同師はさいきん活動の重点をアメリカからしだいにヨーロッパに移しつつあると仄聞しているが、筆者はアメリカで何度かお目にかかったことがある。日本語にも堪能な国際人である。さらに上座仏教のグループもそれにつづいて設立されたが、KZS(ポーランドではなぜかカンゼオンとだけ呼称している)はこれより数年遅れて一九八三年。ごくさいきんではカリフォルニア州ソノマ・ゼン・センターの寂照師もサンガをもちはじめている。だが、サンガとはいってもいくつもあるわけではなく、ここでは異なった指導者が来るたびに異なった名称が用いられるだけで、同じ人がいくつものサンガに加っ

ているというのが実態である。つまり、かれらは指導者とのもつと頻繁な接触を求めている、といえるだろう。

KZSの最初の摂心は首都ワルソー(Warsaw)にある韓国系のカンノン・ゼン・センターを借用したそうだ。そして僅かの期間にメンバー数一二〇名余りを数えるようになり、昨年八年には三〇人が受戒した。しかし摂心をもてるのは年に数回のこと、常時は、ワルソーをはじめラックロー(Wroclaw)、ゲダンスク(Gdansk)そしてプレシエカで地域ごとと一緒に坐る機会を持つているという。筆者が行ったプレシエカはワルソーから南西五〇〇キロ、チエコスロバキアとの国境がすぐ南にせまっている。

今回の摂心は五日間ずつ、一日半の休息日をはさんで二度行われた。大部分の人は両方の摂心に加わったが参加者はのべ八〇人ほどもいた

だろうか、建物は二つあって、ひとつはKZSメンバーの所有になる。三階建ての古い大きな家で半分の人達はここで寝泊りし、また坐った。もうひとつはフィリップ・カプロー師のグループが持つ建物である。このふたつの「禅堂」は山地から流れ出る清流をはさんで対峙し徒歩三分ほどの距離にある。後者は少し小高いところに位置し「ヘアップ・ゼンドロー」と呼んでいたが、われわれの半分は毎日ここから「ダウン・ゼンドロー」に玄法師のダルマ・トークを聴きに行った。あたり一帯はブナ林を中心とした凹凸の多い閑静な山地で、降雨が多いせい、か緑が鮮かだ。住宅がゆるい山の斜面や川沿に点在しており、ほとんどどの家の庭にも石炭がうず高く積まれている。暖房のためでもあるが、台所の調理用燃料でもあるのだ。ガスや電気がふんだんに、しかも簡単に利用できるという社会ではない。のどかすぎるほどの光景が林を散歩しても、村

を通りぬけても展開した。それにもかかわらずヨーロッパでの三ヶ所の摂心のなかでは筆者はポーランドで、もつとも強い熱気のようなものを感じとることができた。彼等の年齢が二十代から三十代半ばということもあるのだろうか、カンゼオンのある人が話してくれたように、社会システムの閉塞からくる精神的な鬱積がばあいによつては若い人々を「ヘゼン」などにむかわせるのだろうか。

二つの摂心のあい間にオランダとアメリカから来た人たちと四人でポーランドの古都クラッコウ(Krakow)に行った。プレシエカから三時間、一見の価値ありというふれ込みにのつたのだが、じっさいには六時間もかかってしまった。誰かの友だちの友だちが宿の世話をしてくれるかもしれないという頼りないありさまで、クラッコウに着いたのは九時過ぎ。それから教えられたように韓国系の「ヘカンノン・ゼン・センタ



久保菜穂

三好 庵



ー」というのを苦勞してようやく見つけ出したのだが誰もおらず、右往左往したあげく、やつとそのセンターのひとりりをさぐりあてた。彼はポーランド人だが英語はほんの片言で、逆にこちらの方はポーランド語など話せる者は誰もおらず苦勞した。だが、お互いに名前も顔も知ら

ずの初対面にもかかわらず、撰心のためにここまでやって来たとして知って快くうけ入れてくれた。筆者もこのときばかりは友だちの友だちといふことばを信じかけたが、これはヘダルマの世界のことだと合点した。翌日は、美術史家の彼が市内を方々案内してくれたが、ポーランドにこれほど大きな古い都市があるとは夢想だにできなかった。朝食をとるためにわれわれが入った高級レストランはすでに十一世紀からそこにあるのだそうだが(ポーランドでは貨幣価値が西側のそれよりも随分低く、貧乏人のわれわれでも高級レストランに入れる)。そして十三世紀

には近隣の諸侯が集まって平和会議をここで行ったと石標を示してくれた。あるカトリック教会はイギリスで見たそれよりも古色蒼然としていた。キリスト像の足の甲の部分磨滅しているのは永年月のあいだ信徒が絶えず礼拝のために手を触れてきたからだろう。

これと同じ日、プレシエカに帰る途中、少し遠回りだがアウシュビッツ(Auschwitz)にも寄ってきた。知られるようにナチス・ドイツのユダヤ人収容所のあったところである。アメリカから来た女性メンバー(現在は西ドイツ在住)の親戚がやはり第二次世界大戦中、おそらくここで殺されたらしい、是非見ていきたいと言っていたからである。戦争の悲惨を今日に伝えるため、現在残されている遺構はそのごく一部分にすぎないということだが、ひと言でいえば二〇〇万人もの人々が、これほどシステイマティックに殺戮されたのはまさに驚嘆に値する。列車

でユダヤ人ゲットーから大量輸送され、收容所にへ順番が来るまでごく僅かの食料を与えられるだけで、身辺の持物はすべて没収される。

やがて近くの「工場」に送り込まれると、ここでは有刺鉄線が幾重にも張りめぐらした砂利の回廊をぞろぞろ歩く。ある者はガス室に、またある者はいったんある建物に入れられた後、すぐ横にある処刑場で銃の洗礼をうけるためだ。

死体はオープン室に運ばれ、消却がすむと灰はそのまますぐ下にとりつけられたレールつきトラックに落されて、一定量になるとトラックが灰を積んでどこかに捨てる。現在はオープンは二器が残されているだけだが、われわれが行ったときには花束がうす高く積まれていた。親戚とか何か強いかわりのある人たちが置いていったのだろうか、この人たちにとっては二器のオープンが死者の墓標なのだ。以前ヴィクタ・E・フランクルの『夜と霧』という本を読

んだことがあるが、何からこんな狂気が生まれるのだろうか、やはり同じ問いをもたざるをえない。生身の人間を使ったとうていたえられそうにない人体実験、妊婦の解剖、頭髮や歯でつくった各種の日用品の製造、等々。

さて九月八日、ポーランドでの撮心を終えたわれわれはやはり同じように早立ちして、ほとんど同じコースを戻った。西ドイツから一緒に来た青年は大学が始まるのでひと足はやく帰り、アメリカの女性はそのままプレシエカに残ったので、復路の車は少しさびしくなってしまった。来たときと同じ西ドイツ内のレストハウステ遅い昼食をすませたのは午後三時を回っていただろうか。数葉のグループ写真をとったのち、筆者は玄法師一行と分かれることになった。KZSのひとりのメンバーの家に二・三日泊めてもらうためである。玄法師らはそのままアムステルダムに行き、アメリカ帰国までしばらく

そこで休息することになっていた(結局、ここでもワークショップを持つはめになったらしい)。

撰心後、西ドイツではデュッセルドルフ(Düsseldorf)・ケルン(Köln)・アーヘン(Aachen)・マインツ(Mainz)・ミュンヘン(München)にそれぞれ数泊し、その間パリにも一週間滞在した。この西ドイツ、フランス旅行も意義深いものであったが、今は割愛する。

### 問題点と展望

じじつ上発足してまだ日も浅いベビー・カンゼオンに一度に多くを期待することは無理としても、注意しておかねばならない点は多々ある。今日のアメリカ、ヨーロッパにおいて仏教グループが量的に拡大するのは決して難しいことではない。むしろかえってそうした量的拡大が、内容を損ねてしまうこともありうるのだ。以下、

筆者の気づいた問題点をいくつか列挙してみよう。

端的に言ってこれまで筆者が回ってきた仏教グループのなかで「フオーム」に関していえばKZSのそれがもっとも整っていない。ここで「フオーム」というのは、たとえば禅堂での所作とか、応量器・鳴物のとり扱い、あるいは誦経の方法などのことであるが、「動く禅堂」とも呼びうるKZSでは団体での継続的な修行形態がとりにくいため、どうしても右のような難点がつきまとう。とりわけヨーロッパでの撰心では、必ず毎回初めての参加という人があり、また稀にしかこういう機会をもつことができないので、他の人々もいくら所作に慣れたところに撰心が終わってしまうという具合で動作が身につかない。日本でもそうだがいわゆる居士・大姉が中心の撰心では、僧堂でやるような細かな規矩の締めかたは事実上不可能であり、この



ことは欧米の摂心でも同じことだ。また一般的に言えばKZSのようにアメリカ人ならアメリカ人がそのグループを指導しているばあい、曹洞宗を名のついても自己流に日本のそれとは相当異なった方法を採用しているか、もしくは指導者じしんが伝統的なヘフオームにじゅうぶん習熟していないことがままたまある。しかもまた日本でいう宗派の別は事実上機能していないといつてもさしつかえないだろう。自己流の改变というのは、それが事情に応じて適切になされていけば問題はない。むしろ日本と異なる環境では改変されるべきものが多くあるかもしれないからだ。だが指導者じしんがじゅうぶん習熟していないばあいはメンバーに及す影響はきわめて大きい。多くのばあい欧米のグループでは具体的なヘフオームについて他に比較する対象がないので、われわれの目からみれば「盲従」とみえるほどその指導者の挙動をまねてい

ることがある。そしてこの傾向は指導者と長く接し、かかわりの緊密なセニヤー・ステューデントほど強い。したがってそれが全体に及す影響ははかりしれないと言えよう。KZSでも同じようなことが指摘できる。

仏教儀式儀礼に属すヘフオームについては欧米人の感覚からすると反発や異和感を抱かせるものもあると思われる。サーヴィス（誦経）とか五体投地の拝などはそうした例のひとつだと言つていいが、意味の説明と時間をかけた適切な実地指導が不可欠であろう。幸いKZSはZCLAと強いコンタクトをもっており、KZSのメンバーが望めばZCLAの夏安居で、伝統に準じたこの種のヘフオームを学ぶ機会を与えられている。

筆者がKZSの生活を通じてしばしば感じることは共同生活を営むうえでと基本的な事柄が訓練されていないことである。ヘフオーム

ともいえないが、たとえば禅堂で歩く時に足音をたてないとか、食事の時もなるべく物音をたてないとか、あるいは使った諸道具・食器類をもとの位置に戻しておくといったことなどである。そういう細かな日常の生活を矯正してこういう人がKZSには残念ながらいらないようだ。何も坐禅や代参ばかりが修行ではないのだが。

こうしたいわば「へ理論と実践との乖離」という問題については前回のレポート（ZCLAに関する）のなかでも少し述べたこともあるけれども、それをやや異なった視点からみると次のようにもいえるのではあるまいか。

## 問題点

われわれが目ざしているのは、知識として得たことがらを行為として現実の生活のなかで、生きたものとして実践していくことにある。へ修

行」というのはその実現化あるいは日常化の絶え間ざるプロセスであり、終点がない。だが、その「へ修行」をどう指導していくかという段になると大きく意見が分かれるだろう。つまりそれは「へ人間観」の相異に根ざしている。一方には人間は万物の霊長であって、修行においても当人の自主性と人格を尊重し、飽くまでも当人の自覚と人間性に基づいた方法が採用されるべきである。心身に対する強制は加えられるべきではない、という考え方があり、また他方では次のような言い方もできる。人間も基本的には動物であり、当人の潜在的な可能性をひき出すためには人間は単独ではそれほど強いものではないから、時には外からの強制も必要である。これらは二つの典型をしめしており、実際には両者が交錯して使われるのであるが、筆者などは道場でどちらかというと後者の方法で育てきたので、文化的背景の異なる人々と日常生活





を共にしてみるとその対比人間の内在的な可能性に期待することは以上に困難で、時間と非常な忍耐のいることがわかる。もちろんそれは彼等が筆者に対して持つ感慨でもあるのだろうが。

KZSについてとくに指摘できるのはみてきたようになんといっても指導者層の薄さと急速なメンバーの増加のアンバランスだろう。ZCLAにおいてもいつとき居住プラクティシヨナーの数が一二〇人余りになったことをわれわれは知っているが、そのさいには老師を中心として彼等をサポートできる数人の高弟たちがいた。しかもKZSのようにアメリカ内外での広い地域にわたって散発的に摂心をもつというのではなく、居住しながら指導者との緊密なつながりをもつことが可能であった。そういう意味で比較していえばKZSは二重にも三重にも負担をかかえているといえよう。まず必要なこと

は数人の有力なプラクティシヨナーを養成することだろう。

もつともすでにこの試みは開始されていてこのグループではニコ・タイデマン (Nico・宗純・Tydeman) 氏とカトリーン・ペイジ (Catherine・玄能・Pages) 女史がヘインタビュー (個人面談) と称して、参禅に類似したことを行っている。タイデマン氏はオランダのアムステルダムに在住で、もともとはキリスト教神学者志望だったがそれには飽き足らず、一九七二年にサンフランシスコ・ゼン・センターで初めて坐禅の経験をもったという。それ以後、急速に仏教に傾倒し、日本の禅寺でしばらく止宿していた時期もある。現在四十六才だが、オランダの人々のために日本仏教の概説書や禅仏教に関する書物を執筆中で、また一方では週二回、居住から遠からぬところにあるヘコスモス (一種の精神修養センター) で坐禅の指導や仏教の学習

会をもっている。またペイジ女史は年齢的にはタイデマン氏より少し若く、ここ数年はほとんど玄法師とずっと行動をともしており、フランス人だが、現在たいいはバー・ハーバーのKZCで起居している。来年一月のはじめの九〇日安居ではヘッド・トレイニー（首座）をつとめる。もともとはパリ市内のロダン美術館で学芸員の仕事をしていたが、一九八一年に両親とネパールに旅行したさい、そこで見た仏教僧の生活に何か啓示のようなものを感じた。それが仏教との最初の出会いで、パリ市内の禅グループもいくつか探訪したという。一九八二年にZCLAの摂心に参加していらい坐禅を続け、このころヨーロッパに居た玄法師に就くようになった。授戒したのは二人とも一九八七年、昨年のことである。

ヘインタビューンでは個々人のかかえている様々な精神的な問題とか、プラクティスに関する

る相談などが行われるほか、「公案」の見解の呈示とその当否が扱われているのだそうだ。前者の問題に関して、セニヤステューデントが行上の後輩に対してなんらかの指導することは可能だろう。しかし「公案」の扱いまで彼等に依託できるのだろうか。少なくとも日本で、とくに臨済宗の専門道場で行われている方法とはまったく異なる。師家のみが仏道修行の權威に基づいて学人を接得できるとされている。ここで筆者が思い至るのは中国の「純禪の時代」といわれた禅仏教勃興期のころの叢林の様子であるが、一山に一四〇〇〜五〇〇人の学人が修行していたころ、具体的な指導にはどのような方法が採用されていたのだろうか。もとより今日の欧米の仏教グループとは形態が様々の面で違うが、ひとりの師家のまわりには、優秀な高弟群があつて彼を援助しつつ修道していたはずである。数多くの語録などによってわれわれは

多くのすぐれた修行者の行持とその生活を垣間見ることはできるが、指導法の細部までにはよく知らされていないのではあるまいか。その実際がはつきりしていれば、そこから学ぶべきものは多いはずだ。もとよりKZSで採用している方法は指導者とプラクティシヨナーとの極端な数のアンバランスから来るいわば苦肉の策なのだが、そこには重大な落とし穴が潜んでいるように思われる。拙速という事態は十分ありうるだろう。大燈国師「第五橋辺二十年」とか無相大師「伊深の聖胎長養」の話などアメリカで語られるのをただの一度も耳にしたことはないが、こんなことを言い出せば彼等に一笑に付されてしまうだろうか。いずれにせよなるべく早い時期に適当な新しい指導者が彼等じしんのなかから生まれる必要がある。

一方、アメリカ・ヨーロッパの仏教グループの強みは「横の連絡」の緊密さにある。それは

たとえば冒頭で書いたように、晋山式の刻限に式に列席できない地域のメンバーが集まって一日坐禅の機会をもつといった行動に端的に示される。誰がとくに言い出すわけでもないのだが、この種の活動の手ぎわよさ、協調性は見ていて誠に快い。おそらく指導者不足をなんらかの面で補填できることがあるとすれば、このようなメンバー間の協同性に基づいた相互学習だろうと思われる。メンバー相互間の研鑽のなかからいい指導者が生まれるのではあるまいか。

ところでこれほど広範囲にわたってメンバーをかかえているカンゼオン・サンガは今後どういうふうに展開していくのだろうか。他の禅グループとはまた異なった固有の問題をかかえていると思われる。くりかえしていえばひとりの指導者に驚くほど多くの人達がよりかかっており、また日常生活のなかでのプラクティス（修行）が強調されているだけに、指導者とプラク

テイシヨナーがなるべく多くかわれる機会が  
どうしても不可欠だろう。すでにみたようにリ  
ーダーである玄法師のこの一年間の日程は本拠  
地であるバー・ハーバーで七ヶ月、あとはアメ  
リカ国内とヨーロッパでの撰心のために半年と  
いうぐあいになっている。多くの無理があると  
思われるし、なんらかの改変をせまらざるをえ  
ないだろう。この点を玄法師に尋ねてみるとこ  
ろ、答えはおよそ次のようであった。今後は一  
年のうち九ヶ月はバー・ハーバー、あとはヨー  
ロッパおよびアメリカ国内の撰心指導に費し、  
しだいに重点をKZCに移していきたい。ヨー  
ロッパへはそのうち年二回ぐらい行くにとどめ  
るつもりだ。しかしセンターじたいを拡大する  
ことつまり新しい建物の購入は現在のところ考  
えておらず、三十人前後の集中的な撰心を行え  
るようにもつていく考えである。そしてできれ  
ば伝統的な私たちの禅堂がほしい。

こうした発言はサンガじたいが拠点をもつに  
至ったことから出てくるわけであるが、どうじ  
にある種のふるい分けという意味もあるのでは  
あるまいか。またそれはいたしかたのないこと  
かもしれない。ZCLAのスタッフとして長く  
働いてきた同師が、そこでの経験からあまり多  
くの人数をかかえるのはプラクティスの内容を  
充実させるためにも、また経済的な面での負担  
を考慮したばあいも得策ではないと判断したか  
らであろう。KZCでは今秋二ヶ月間（一九八  
八年九月二九日～一月二三日）のトレーニン  
グの期間をもった、数ヶ所にわたる単発的な撰  
心の連続ではなくて、一定箇所でのこれだけのま  
とまった時間を坐禅に費せたことはメンバーに  
とっても喜びとするところだろう。そして、一  
九八九年にはKSとして初めての九〇日安居  
（一月一九日～四月二〇日）が行われることにな  
っている。それによると最初と最後の休日分



なし一ヶ月摂心で、しかもはじめの月は全日程参加者のみ、二ヶ月日は最低二週間、さらにさいごの月は最低一週間参加できる者という条件が示されている。おそらく右のようなやり方は実験的なものであって、随時生じてくる問題(たとえば仕事の都合で朝夕とか週末にしか摂心に通えないバーハーバー在住の人は参加できるのか否か、などさしあたりまっ先に生じる問題だろう)については柔軟に対処していかざるをえない。それに対してたとえばどうしてもKZCに来て修行したいという人のためには家族ぐるみで受け入れるようにしたいともいう。修行と称して別居したため家庭が崩壊したというようなことを避けたいためだ。

だがKZSがプラクティスの道場として成り立っていくために早晚かかえるもつとも大きな問題はヨーロッパからのメンバーの処遇であろう。つまり交通費とか長期の滞在には大まいの

費用を要するが、そうなつてくるとまとまった時間や財産のない人々はたいへんな苦痛を強られることになる。先にふるいわけといったのはじつはこのことである。アメリカ人が広い国内を比較的自由に動き回るのとは異なり、外国人にはアメリカでの収入の道はごく限られているのである。

いずれにしてもKZSは今後、次々に新たな問題をかかえることになるだろう。サンガの結束が期待される。

## おわりに

今回のレポートは報告というよりはむしろ感想文になってしまった。調子がたえず変化し、一貫した内容になっていない。とくにヨーロッパに関する記事について、このことがいえる。

それは筆者の文章表現力や構成力の非力によるものであるが、どうじにヨーロッパでの一ヶ

月間の摂心とKZCでの生活の様子を自分なりになんとかかひとまとめにして記録にとどめておきたかったからである。

また小文中、冒頭からことわりなしに「カンゼオン・サンガ(KS)」と「カンゼオン・ゼン・センター(KZC)」とを区別したが、筆者はKSをKZCより大きな概念とみなしている。つまりKZCはKSの本部だが、彼等のいう「ヘサンガ」というものの全体から見ると一部分にすぎず、それぞれの小サンガはKZCを指向しつつも独自の活動を行っていることを強調したかったためである。

最後になってしまったが、筆者のインタビュ어의申し込みに快よく応じて下さった玄法師やKZCの人達に感謝の意を表したい。何人かはすでに臘八摂心のためヨーロッパに帰ってしまった。玄法師も昨日の早朝ヨーロッパにむけて発たれた。(一九八八年一月二〇日)

